LAB 4

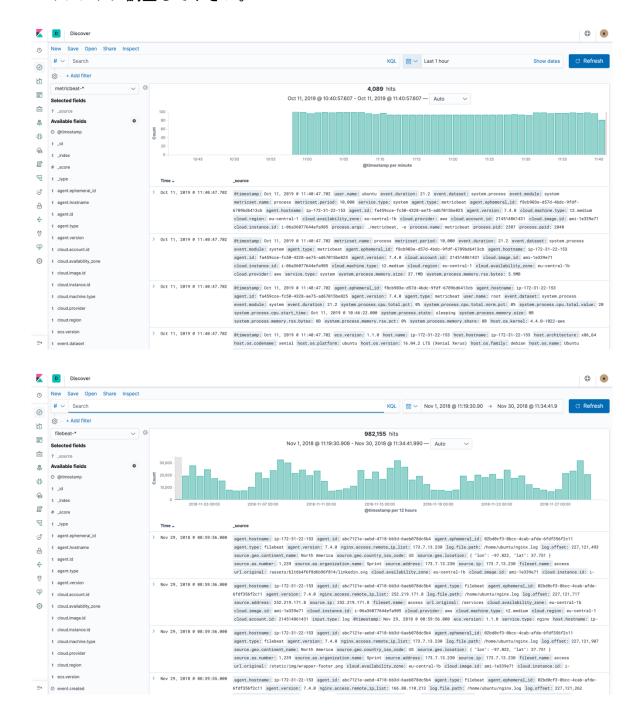
はじめに

本 Lab では、Elastic Stack のそのほかの高度な機能について体験していただきます。実際に体験していただくのはセキュリティ、アラート、機械学習になります。

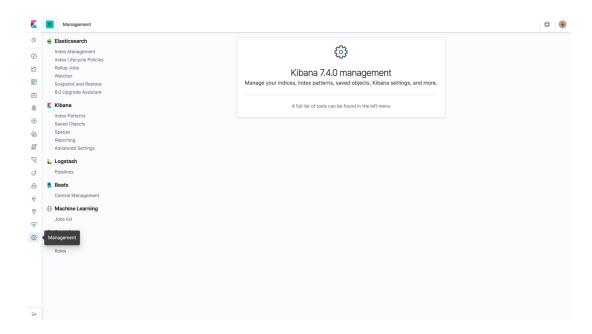
機能	概要
セキュリティ	適切なユーザーに適切なアクセス権限を付与する機能、それが Elastic Stack の Security です。たとえば IT 部門や事業部、アプリ開発チームごとに善意のユーザーを管理することで、不正な侵入を 防ぐことができます。また、お客様や経営陣にも個別の権限を付与して、Elastic Stack のデータを安全に、安心して共有できます。
アラート	Elasticsearch のクエリ機能をフルパワーで活用する Elastic Stack の Alerting なら、データの重要な変化を見逃しません。つまり、 Elasticsearch でクエリできるものは何でも通知可能です。
機械学習	トレンドや周期性などからデータの振る舞いを自動的に、リアル タイムにモデル化し、すばやく問題を特定して原因分析を手助け します。さらに、誤検出を防ぎます。

Security

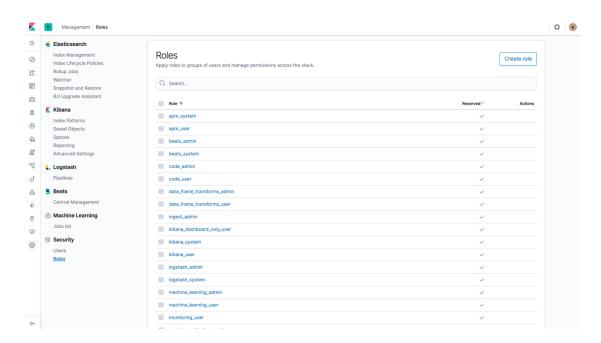
1. Kibana の menu から"Discover" を選択します。 "filebeat-*" か "metricbeat-*" index pattern を選択します。 "filebeat-*" を選択した場合、日付のレンジを "Nov 1st, 2018 – Nov 28th, 2018"として下さい。"metricbeat-*"を選択した場合、適切な日付のレンジに調整して下さい。



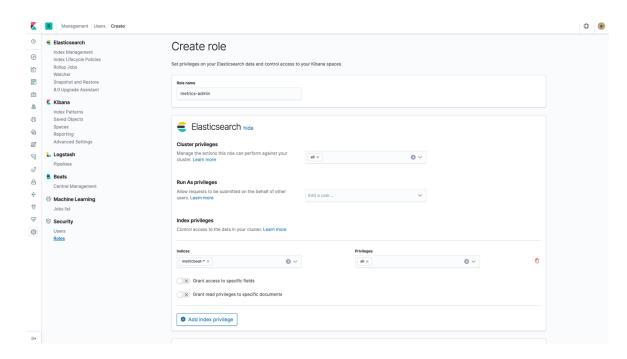
2. もしこれらのユースケースが異なるグループ(メトリクスグループとロググループ)に別れていて、例えばコンプライアンス上、メトリクスグループにはログを見せてはいけないとしたら、どうしますか?そこで Elastic Security の出番です。 "Management" を Kibana menu から選択します。



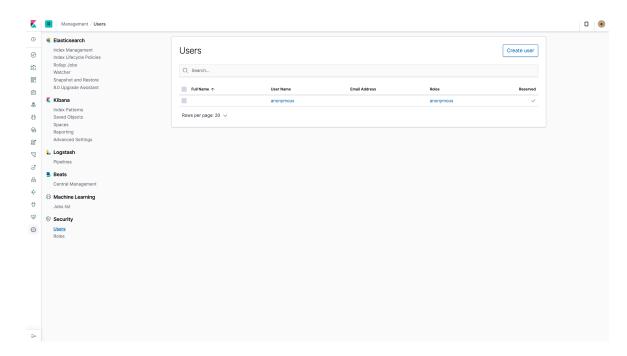
3. Security > Roles から"Create Role"をクリックします。



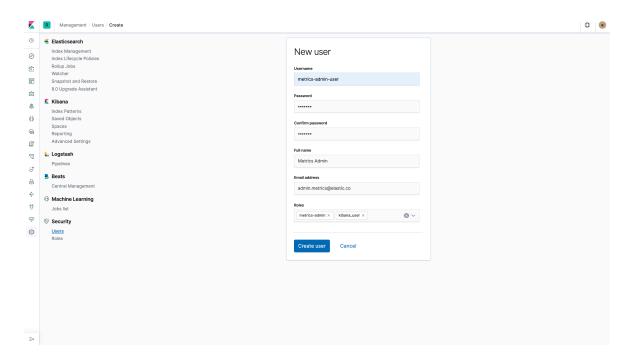
4. 新しい role に名前をつけます ("metrics-admin" for example)。Cluster privileges で "all"を選択し、Indices は"metricbeat-*"を選択します。Index privileges は "all"を選択します。最後に "Create role"をクリックします。



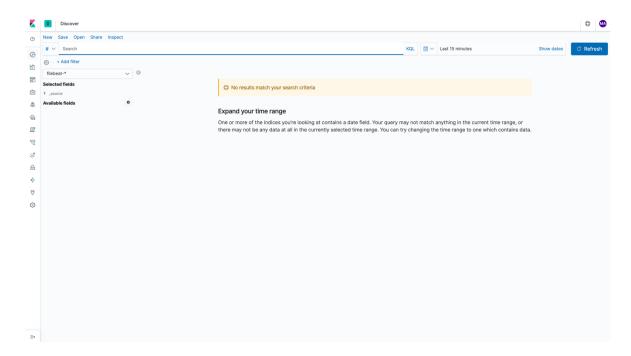
5. Role が作成されたら、"Management" タブで Security > Users から"Create new user"をクリックします。



6. Username と password, full name, email を入力します。Roles には、"kibana-user" と先ほど作成した"metrics-admin"を追加します。最後に "Create User" をクリックします。



7. 別のブラウザ画面を開き、新しく作成したユーザーで Kibana にログインします。 "Discover" タブを開いてみましょう。Index pattern で"metricbeat-*" しか全てのデータを見ることができないことに気づきましたか?"filebeat-*" index patternでは、データを見ることができません。



index pattern "filebeat-*"自体は見ることができます。

8. "metricbeat-*" index pattern を再度選択します。"metricset.name" field をクリック し、収集したメトリクスの種類を確認します。

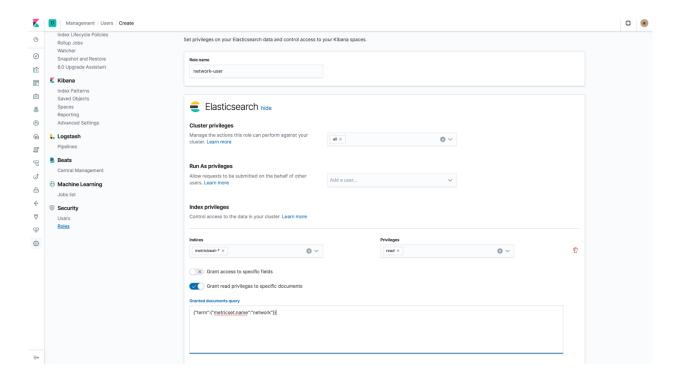


9. 一例として "network"というものがあります。例えば、ネットワークオペレータはネットワークデータに関するデータだけ見ることができて、他を見ることはできない、というシナリオを想定してみましょう。ドキュメントレベルの属性ベースのアクセスコントロール(document level security)を提供すべきでしょうか? 再度"elastic"ユーザーでログインし(または、既に開いているブラウザ画面に戻り)、"network-user"という role を作成しましょう。

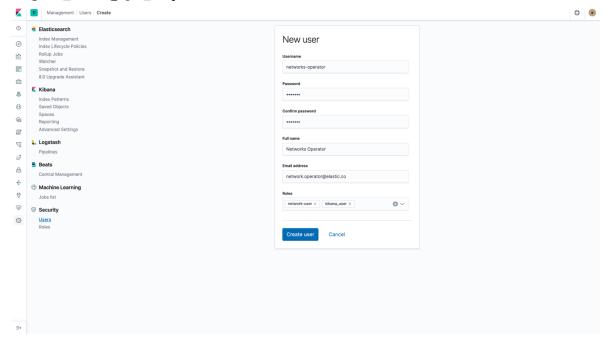
以下の設定を行います:

- Cluster privileges : all
- Indices: metricbeat-*
- Index Privileges: read
- Click on: Grant read privileges to specific documents
- 次の文字列を入力: {"term":{"metricset.name":"network"}}

最後に "Create Role"をクリックします。



10. 新しく作成した role に紐づく user を作成します。 "kibana-user" を必ず追加して下さい。これを忘れると、新しく作成した user は Elasticsearch APIs にアクセスすることができません。



11. 新しく作成した user で再度ログインします。Discover から "metricbeat-*" index pattern を選択します。"metricset.name" field をクリックして展開してみましょう。"network".だけが見えることがわかりますか?他の値、metrics-admin では見ることができたものは、この user では見ることができません。



12. (Optional) Elastic Stack の Security 機能、Field Level Security をもう少し見てみましょう。elastic user でログインし、 "filebeat-*" index pattern を選択します。 日付の範囲を between Nov 1st, 2018 - Nov 28th, 2018 とします。

"nginx.access.remote_ip_list", "source.address", "source.ip"をクリックしてみて下さい。これらの fields はアクセスした user の IP です。この情報は admin user のみがアクセスできるようにしたい場合を考えてみましょう。



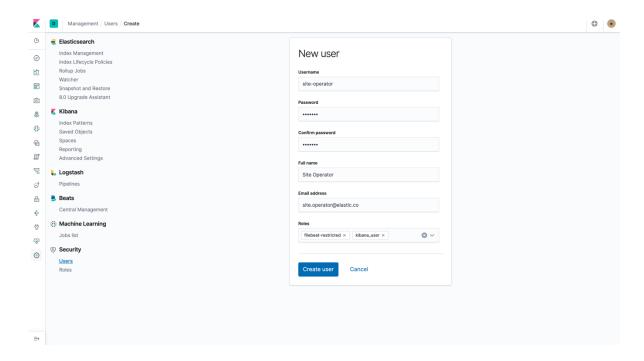
どのように解決できるでしょうか?今回は、Elasticsearch の API の API を使って新しい role を作成してみましょう。Kibana から"Dev Tools"をクリックし、以下のコードをペーストして下さい。

```
PUT _security/role/filebeat-restricted
  "cluster": [
    "all"
  "indices": [
    {
      "names": [
        "filebeat-*"
      "privileges": [
        "read"
      "field_security": {
        "grant": [
        ],
        "except": [
          "source.address",
          "source.ip",
          "nginx.access.remote_ip_list"
     }
  "run_as": [],
 "metadata": {},
 "transient_metadata": {
   "enabled": true
```

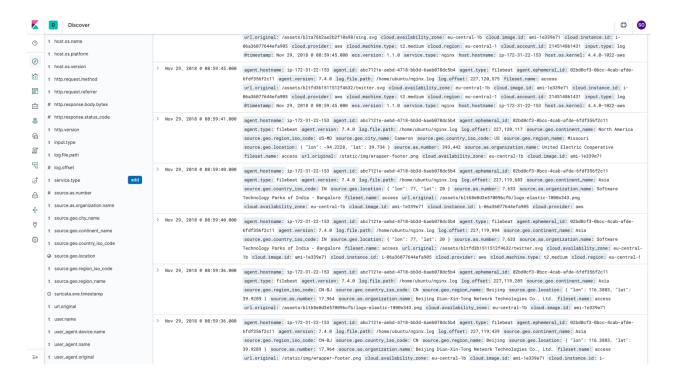
API call を実行します。

```
Dev Tools
                                                              0 0
History Settings Help
 Console Search Profiler Grok Debugger
 55
命
.0.
ø
I
무
Î
÷
4
$
```

Role を作成したら、 "site-operator"という user を作成し、先ほど作成した role "filebeat-restricted"を割り当てます。

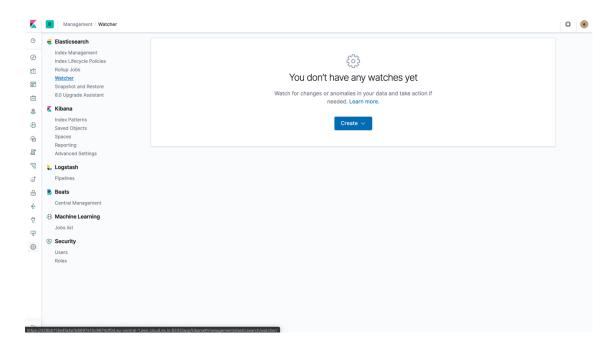


新しく作成した user でログインし、 "Discover" から "filebeat-*" index pattern を選択します。IP fields が見えなくなっています。

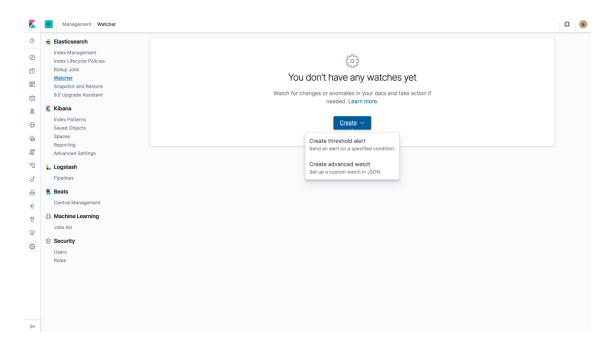


Alerting

1. Kibana の "Management"から、"Watcher"をクリックします。



2. まず、シンプルな threshold alert を作成しましょう。 "Create threshold alert" ボタンをクリックします。

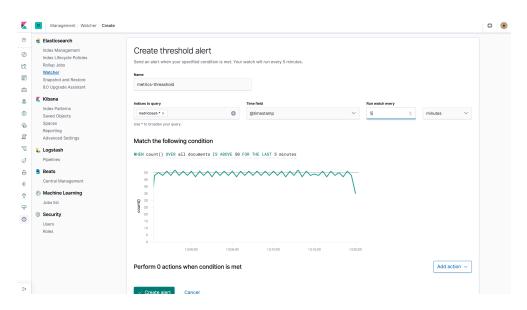


3. 名前を付けて、以下を入力します。

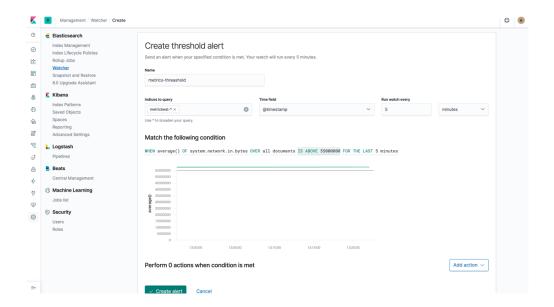
Indices to query: metricbeat-*

Time filed: @timestamp Run watch every: 5 min

Matching condition に count() を選択して、直近 5 分間の全てのドキュメントに対して、threashold ラインを上回るように閾値(IS ABOVE)を調整してみましょう。

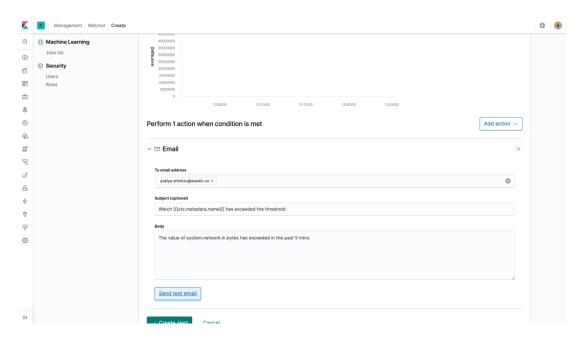


次に average of system.network.in.bytes を直近 5 分間の全てのドキュメントに対して選択し、threashold ラインを上回るように閾値(IS ABOVE)を調整してみましょう。



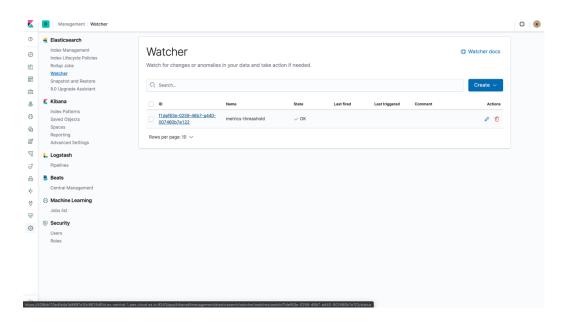
閾値を超えるシナリオに対して action を定義します。Email action を選択し、LabO で入力した whitelist の email アドレスを入力し、Body に email のテキストを入力します。

"Send test email"をクリックすると、email が配信されます。

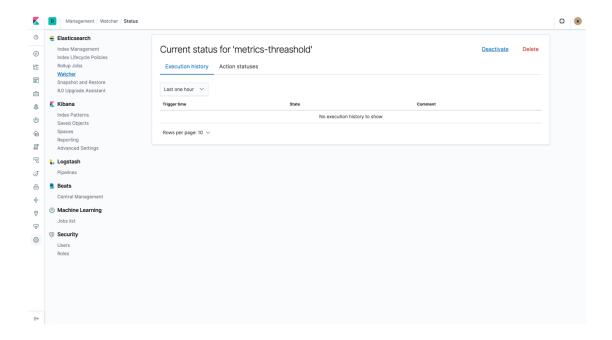


"Create alert"ボタンを押し、Watcher の設定を保存します。

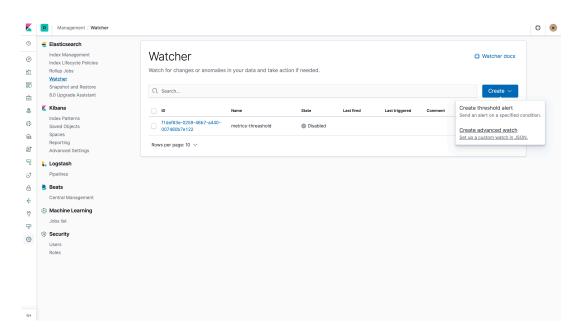
4. この状態のままだと、5 分毎に email を受信することになります。これは望まれないことかもしれません。当該の watch をクリックします。



Deactivate をクリックし、Watch を無効化します。



5. Watcher スクリーンに戻ります。次に "Create advanced watch"をクリックします。



ここでは、Elasticsearch に query し、アラートを上げる方法を試してみます。データに基づいてどのような alert も作成できる柔軟性を提供します。「検索できるものは、アラートできる」と言えるでしょう。

ある IP アドレスから 1000 以上の悪意あるアクセスがあって、それを検知したいとしましょう。

最初に頻度を決めます:

```
{
  "trigger": {
    "schedule": {
       "interval": "1d"
    }
}
```

次に search:

```
"input": {
   "search": {
     "request": {
       "search_type": "query_then_fetch",
       "indices": [
         "filebeat*"
       ],
       "types": [],
       "body": {
         "size": 0,
         "query": {
           "bool": {
             "must": {
               "match": {
                 "nginx.access.remote_ip_list": "1.190.172.233"
               }
             },
              "filter": {
               "range": {
                 "@timestamp": {
                   "gte": "now-290d/d",
                   "lt": "now/d"
  } } }
```

次に condition:

```
"condition": {
    "compare": {
      "ctx.payload.hits.total": {
```

```
"gte": 1000
}
}
}
```

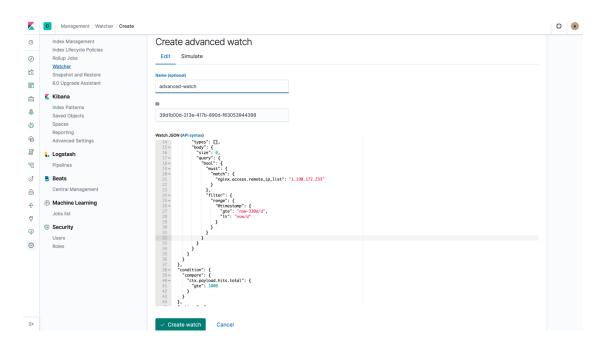
最後に action:

```
"actions": {
    "send_email": {
        "email": {
            "profile": "standard",
            "to": [
                  "yukiya.shimizu@elastic.co"
            ],
            "subject": "Watcher Notification",
            "body": {
                 "text": "There are {{ctx.payload.hits.total}} documents in your index. Threshold is 1000."
            }
            }
        }
     }
}
```

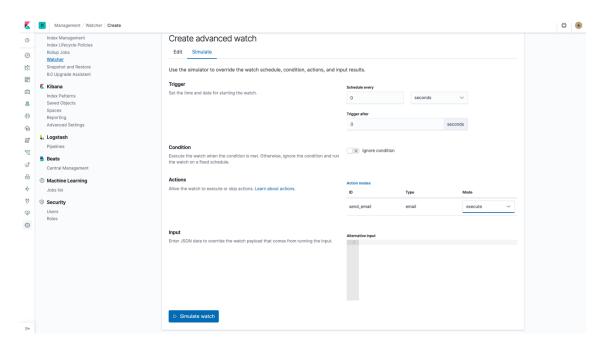
上記を1つにまとめます:

```
"trigger": {
  "schedule": {
    "interval": "1d"
},
"input": {
"arch"
  "search": {
    "request": {
      "search_type": "query_then_fetch",
      "indices": [
        "filebeat*"
       "types": [],
       "body": {
         "size": 0,
         "query": {
           "bool": {
             "must": {
               "match": {
                 "nginx.access.remote_ip_list": "1.190.172.233"
             "filter": {
               "range": {
                 "@timestamp": {
                   "gte": "now-330d/d",
"lt": "now/d"
"condition": {
   "compare": {
     "ctx.payload.hits.total": {
      "gte": 1000
},
"actions": {
  "send_email": {
    "email": {
      "profile": "standard",
      "to": [
        "yukiya.shimizu@elastic.co"
       "subject": "Watcher Notification",
         "text": "There are {{ctx.payload.hits.total}} documents in your index. Threshold is 1000."
```

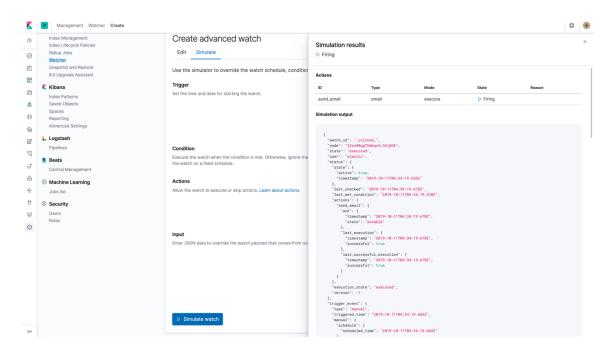
上記 JSON を Watch JSON にカット&ペーストし、名前を付けます。



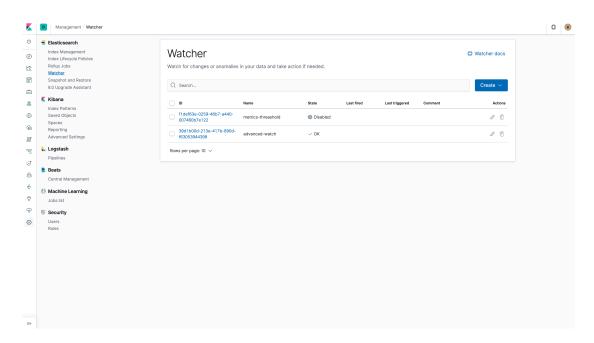
セーブの前に、Simulate タブをクリックし、 Simulate Watch をクリックします。 その際、Simulation Mode は、"Execute"とします。



Watch は "Firing"と表示されます。これは query がヒットしたことを意味します。

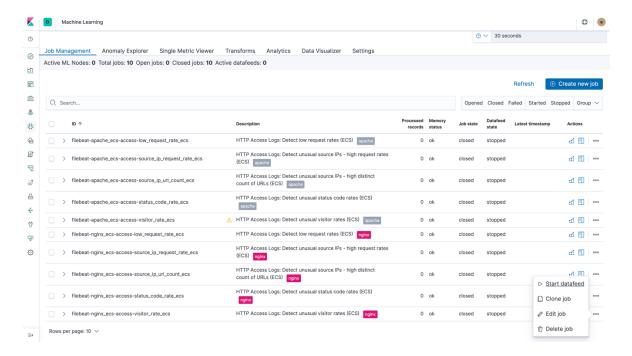


Edit Tab から"Create alert"ボタンをクリックし、保存します。

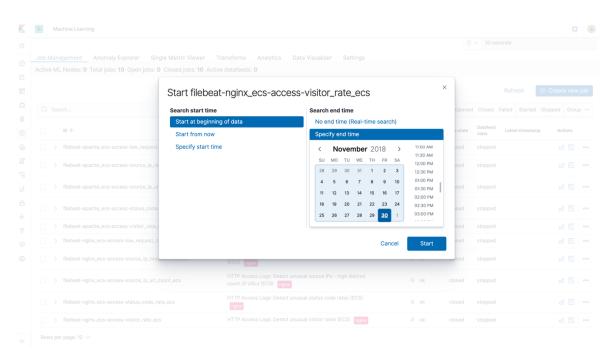


Machine Learning

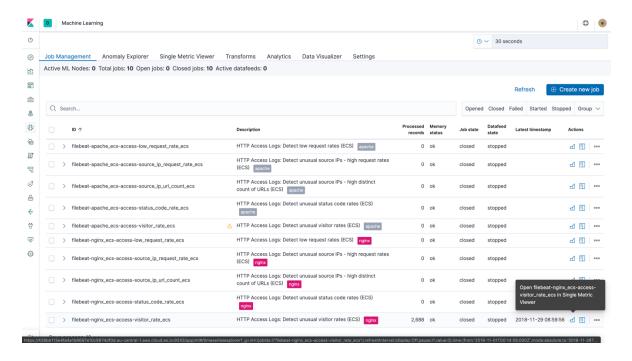
1. Kibana 上で "Machine Learning" を選択します。Job リストから"filebeat-nginx_ecs-access-visitor_rate_ecs" を選択し、"Start datafeed"をクリックします。



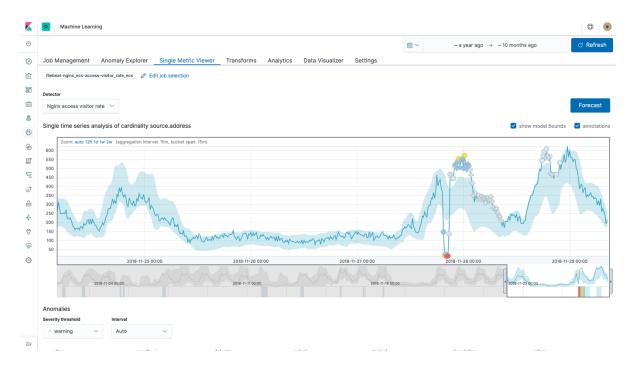
2. 時間軸の指定で、"Start at beginning of data" を選択し、"Search end time"は、30th November 2018 を"Specify end time"で指定し、"Start"をクリックします。



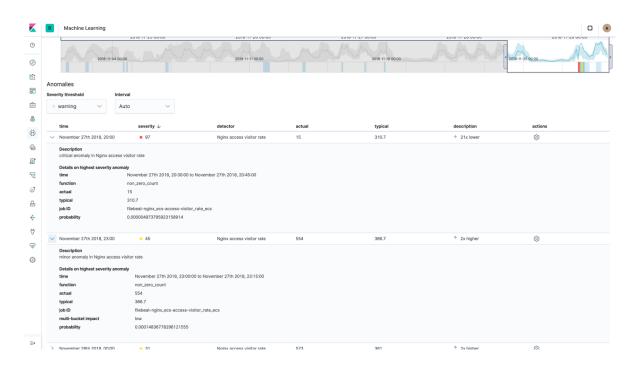
3. Datafeed state が "stopped" に変わるのを待ち、結果を確認するため "Single Metrics viewer"をクリックします。



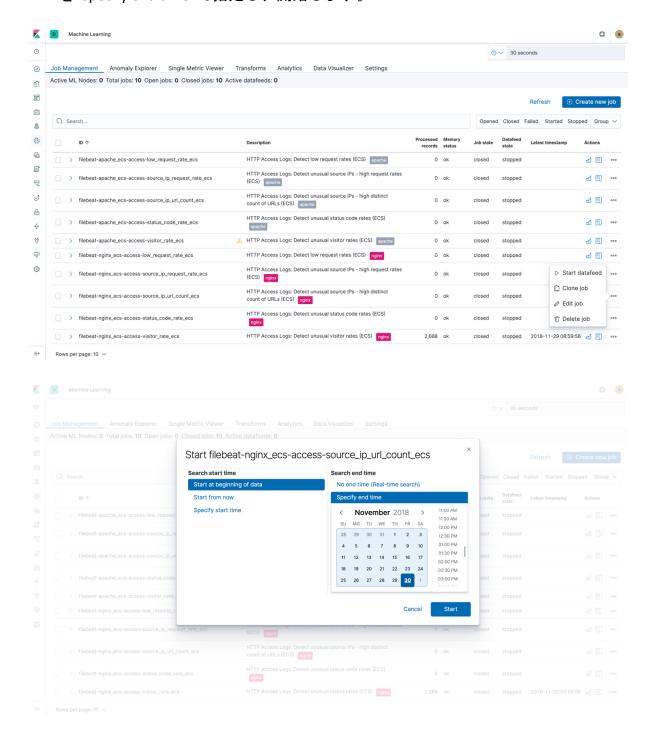
4. モデルがどのように構築されたかを確認しましょう。終わりの方に、visitor rate の急激な落ち込みと上昇という異常がわかるはずです。



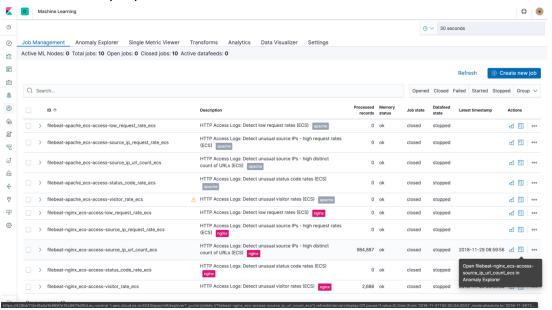
5. 上位2つの異常を展開してみましょう。1つ目は21倍低い落ち込みで、2つ目は2倍高い上昇です。何を異常とするかは、実際の値(actual)が期待値より高い/低いではなく、発生の確率(probability)です。Probability は、異常を展開すると表示されます。



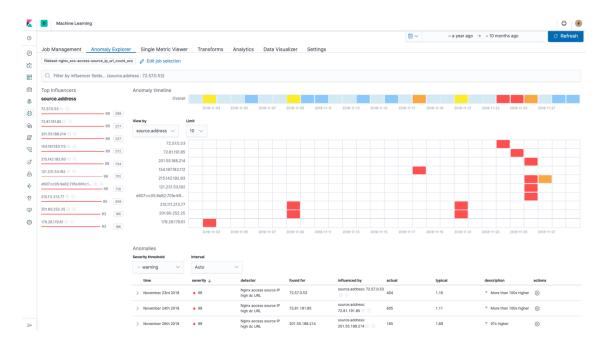
6. 再度、"Machine Learning" メニューから "filebeat-nginx_ecs-access-source_ip_url_count_ecs" job を選択し、"Start datafeed"をクリックします。 Start at the beginning of data を選択し、"Search end time"は、30th November 2018を"Specify end time"で指定し、開始します。



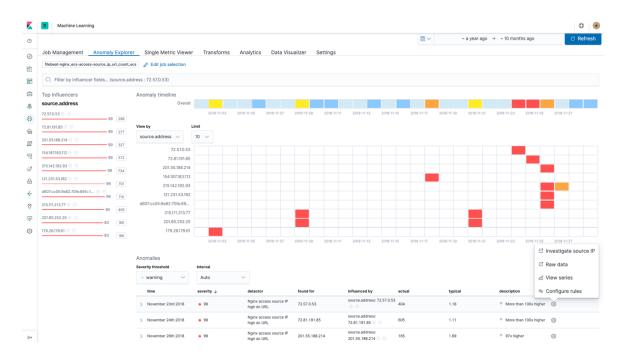
7. Datafeed state が "stopped" に変わるのを待ち、今度は、結果を確認するため "Anomaly Explorer" をクリックします。



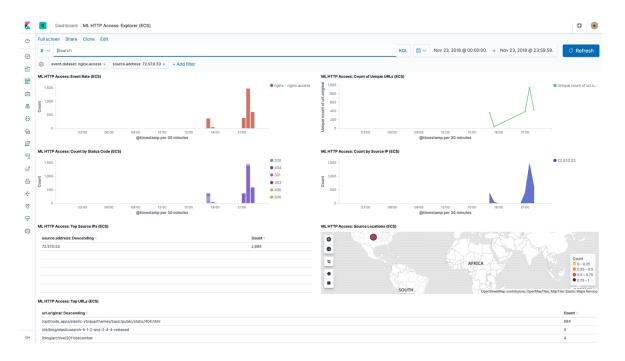
8. Anomaly explorer から特定の IP でブレークダウンされた結果を確認することができます。Influencers はデータセットの中で異常として見なされるための、統計的に顕著な要素です。機械学習 job を定義する際に、オプションとして特定のフィールドを contributor として定義することができます。 Anomaly Timeline で job の結果の概要を見ることができ、マトリクスではそれぞれの IP の結果を見ることができます。 Overall の結果と個別の IP の結果が同じでないことに気付きましたか? IP "154.187.183.112" は 99 に対して、overall anomaly score は 52 です。



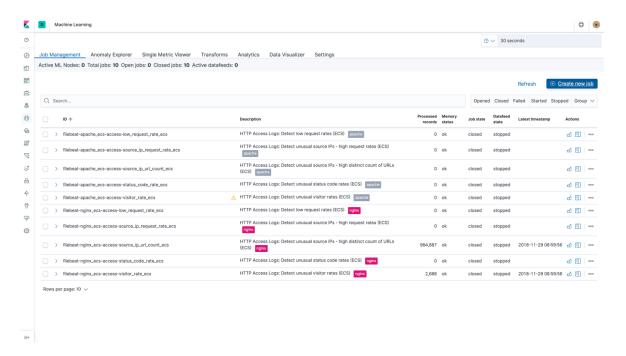
9. 機械学習 job を設定する際に、結果と特定の view を紐づけることができます。 View を開く時に、当該 job のメタデータが渡されます。 "actions"から "Investigate source IP"を開いてみましょう。



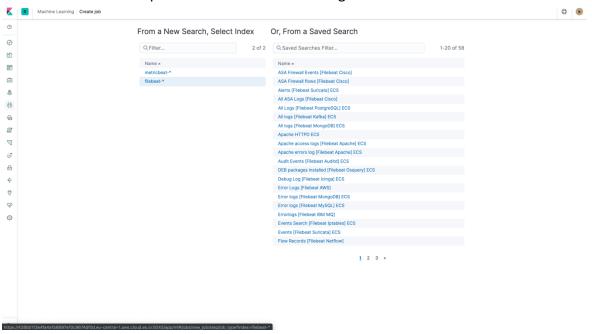
ML HTTP Access: Explorer (ECS) dashboard が表示されます。

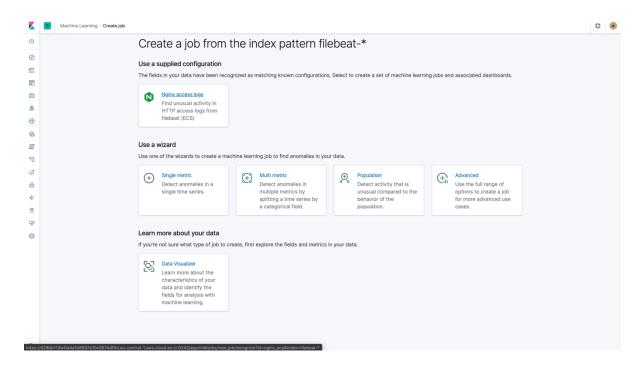


10. (Option) 自身の Single Metrics Machine Learning job を作ってみましょう。 Machine Learning をクリックし、Create Job をクリックします。

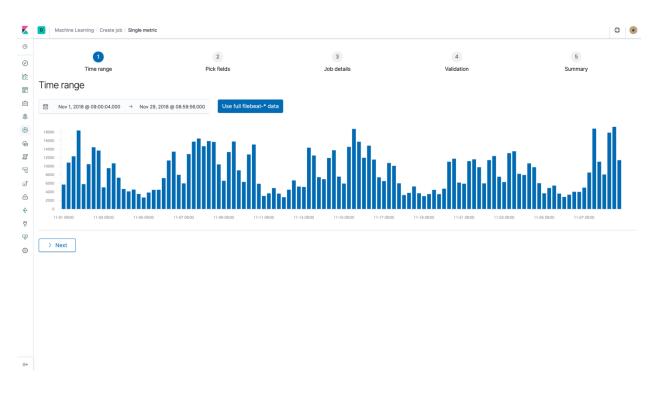


"filebeat*" index pattern を選択し、次に Single metric を選択します。

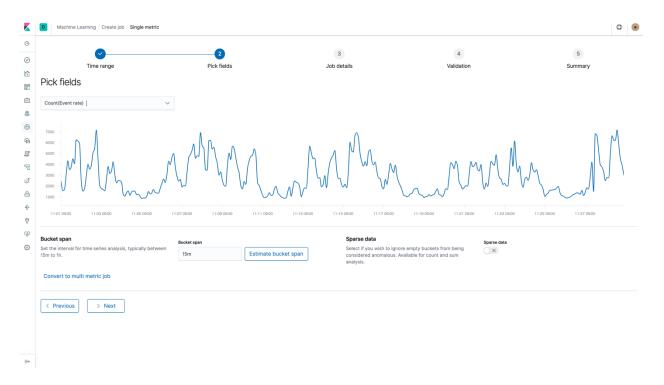




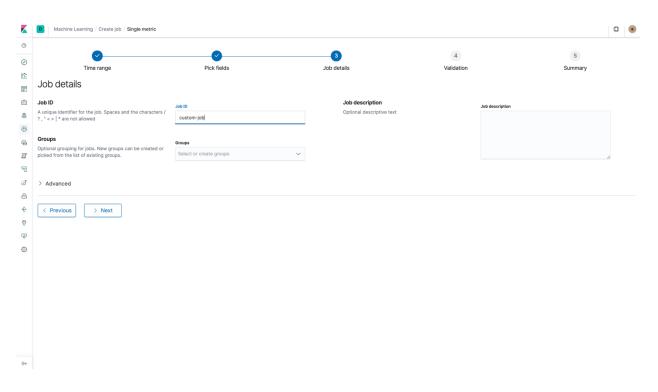
Time range はデフォルトで識別されたままにして、Next をクリックします。



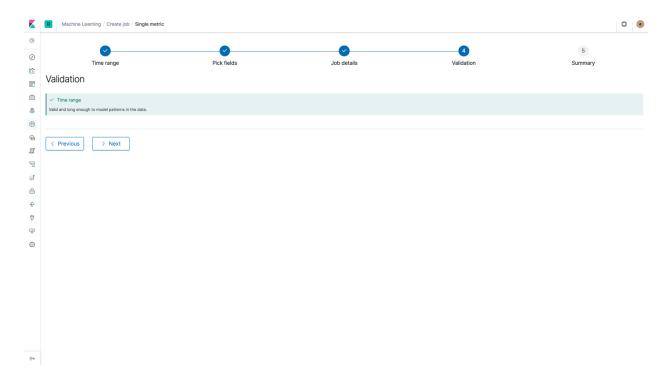
Field に Count(Event data)を選択して、Next をクリックします。



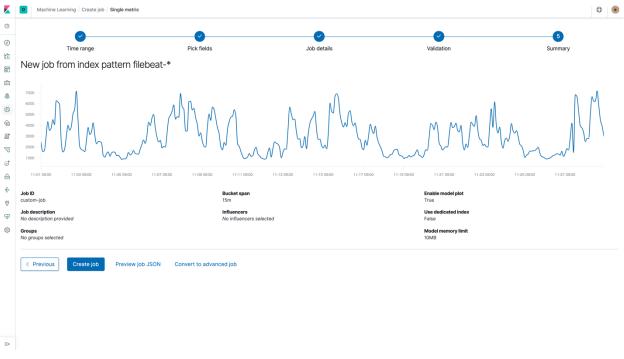
Job ID を入力し、Next をクリックします。



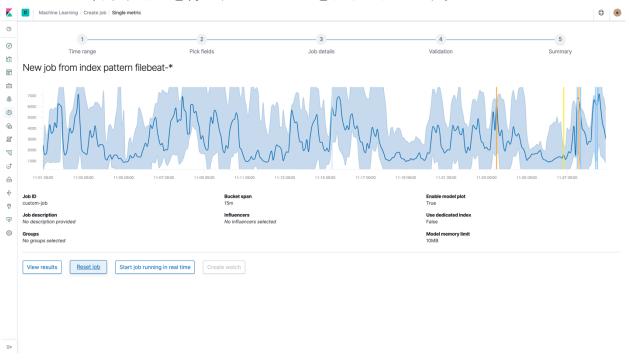
Validation で Valid と出力されたら、Next をクリックします。

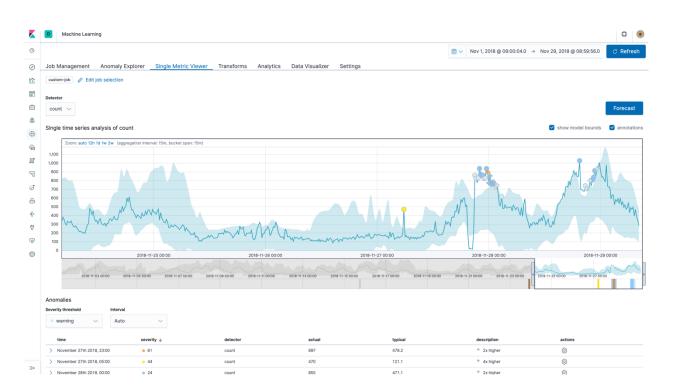


最後に、Summary で Create job をクリックします。



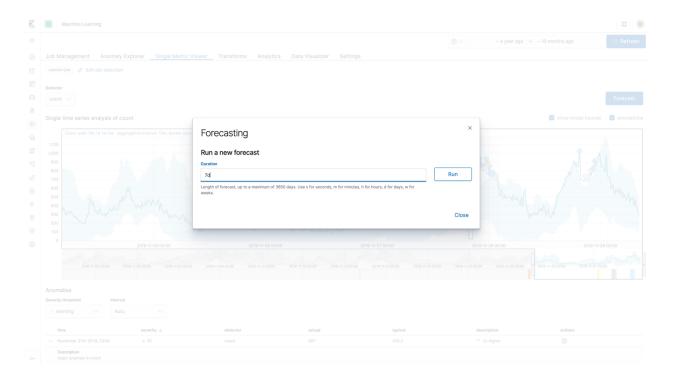
Job が終了するのを待ち、View Result をクリックします。





Single Metrics viewer で、異常をクリックしてみましょう。 異常はどのようなものですか?

次に Forecast ボタンを押して、期間を 7d に設定して Run をクリックします。



Forecasting 結果を見てみましょう。Forecast パートは茶色で表示されています。

